

カラオケ体験して知ること 3ゲン（現場、現物、現実）、5ゲン（原理、原則追加）

伊東和樹は練習することで、歌える曲が増えてきたことが嬉しかった。何よりも、飲み会の席にカラオケがあっても、気持ちが落ち込むことはなくなった。歌の上手い人に言わせると「誰も聞いていないんだから」と言われるが、音痴にとっては人前で歌えないのである。

いろんな歌を歌っていると、点数が上がりやすい曲となかなか上がらない曲があることに気付いた。自分の声の高さにあっている歌手の曲が歌いやすいのである。

和樹がカラオケ教室に通う前、二次会のスナックは必ずと言っていいほど、カラオケであった。和樹はずーっと断っていた。皆が楽しく歌ったり飲んだりしている席が、和樹にとっては苦痛以外の何ものでもなかった。会社勤めの付き合いと諦めていた。しかし、入社して間もない和樹にとっては二次会を断ることができなかった。

カラオケで、よくキーを1つ上げてとか、キーを2つ下げてとかいう人がいた。「何と、かっこをつけて。そのまま歌え」と内心思っていたが、音痴の和樹が言えるわけがなかった。

カラオケ教室と一人カラオケをやってきて、和樹は気付いた。キーが1つ違うだけで、歌いやすさが違うことに気付いたのである。自分に合ったキーがあるんだ。自分が歌いやすいキーがあるんだということ、たくさんカラオケで歌って実感したのである。かっこ付けてキーを変えていたのではなく、歌いやすいキーを知っていて、それを単に希望しただけだったと、体験して知ったのである。

和樹は夏川りみの歌「などそうそう」が好きだった。また歌いやすく、カラオケ採点機の点数も高くなった。夏川りみの声の高さが自分の高さに合っていたのである。それから和樹は夏川りみの歌をカラオケBOXで選んで歌うようにした。「花になる」「微笑みにして」「愛よ愛よ」「ココロツタエ」「道しるべ」など、自分のキーに合ったので歌いやすかった。夏川りみはどちらかというとキーが高かったが、和樹は自分の声のキーが高いことも知った。かなりの高音も出せることが分かった。どこまで音程がでるかの測定器も買って確認したことがある。なんと3オクターブ出せた。問題は自分でコントロールできないことであった。

カラオケを500時間以上体験して知ることがたくさんあった。

諸葛孔明が子孫に残した言葉がある。

「学ぶことで才能は開花する」

自分の才能はどこに潜んでいるか分からない。それを見つけるために学び努力を続けることなのであることを実感したのである。人は簡単にあの人は才能あるからと片付けるが、その人はそれにどれだけの時間とお金をかけてきたか。苦手なことは時間もお金もかけてこなかったのだと、和樹はカラオケの体験で学んだ。

和樹は退職とほぼ同時に「ロゴセラピー」を学んだ。ロゴセラピーは『夜と霧』の著者でオーストリアの精神科医ヴィクトール・フランクルが始めた心理療法であり、フランクル自身がそれをナチスの強制収容所で実践したのである。

ロゴセラピーは精神が心と身体の上位に位置すると考える。心と身体は病気になるが、精神は病気にならないと考える。そしてロゴセラピーは3つの価値、①創造価値、②体験価値、③態度価値があると説明する。まさに体験することで知ることがたくさんあるのである。いろいろなことを体験することは価値あることなのである。体験しないと本当のことはなかなか分からないのである。疑似体験するためにも、3ゲン、5ゲンの実践が品質補用にも実生活においてもとても大切なことを仕事を通して学んだ。

和樹は大きな品質トラブルが発生すると、どんなに忙しくても、製造の現場に行った。そして現場を見て、現場の人の意見に耳を傾け、起きている現実から何が起きているかを考え、原因究明を行った。原因究明ができないときは仮説を立ててその検証を行った。そしてその事柄が原理・原則に合っているかを常に確認した。

原理・原則は人生においては、それが人々の為になっているか？ 一部の人のためだけでなく皆のためになっているか。人を救うための宗教で言えば、人を救うと建前にして、人を犠牲に強いていないか、不幸にしていないかが問われるのである。

和樹は3ゲン、5ゲンで、現場にいる人の声を大切にしてきた。最近の医薬品製造の問題を見ていると、責任者が現場を知らない、現場の声を聴かない、原理・原則のための知識を知らないことに驚いたが、それが現実なのかもしれない。品質保証に関わる人への投資を経営のトップがしてこなかったツケが今牙を剥いて仕返ししているのかもしれないと思った。医薬品会社のトップは、研究開発に力を注ぎ、次に営業に投資していた。三番手の生産の中でも、製造を優先し品質保証は後回しだった。それは出世に於いても顕著であった。

政治も国民の苦しみを知ろうとする、3ゲン、5ゲンを実践していないのが悲しかった。それを考えてもどうしようもない。今はカラオケで歌うことでストレス発散、免疫力向上がコロナ対策の自衛手段だと和樹は自分に言い聞かせながら、カラオケを楽しんだ。でも、できたら、一人カラオケでなく、誰かと一緒にカラオケを楽しみたいと思ったが、そんなに簡単にカラオケ仲間を作ることができなかった。和樹はコミュニケーションを苦手にしていった。仕事のコミュニケーションは脚本を書いて演じればよいので何とか仕事で困ることはなかったが……。